幼児の社会的・感情的発達に関する研究（Ⅰ）*

——方法論を中心に——

島田俊秀・松田君彦・大坪治彦

（1984年10月15日　受理）

Research on the Social and Emotional Development of Young Children (I) : Methodology

Toshihide SHIMADA, Kimihiko MATSUDA and Haruhiko OHTSUBO

はじめに

教育というのは，幼児が未来社会の建設的構成員の一人になるように，成長発達していく過程を計画的に援助し指導する機能である。教育活動は，一方では幼児が将来，一構成員となるべき社会は，いかなる人間を要求しているか，つまり未来の社会における理想的人間像を想定しながら，他方では理想的な人間像とかけはなれた現実の幼児の姿を理解することから始まる。われわれが，現実の幼児をいかなる方法で，いかに理解するかということは，幼児を教育するために望ましい教育的環境を設定し，教育していく上で決定的な影響をもつものである。

ところで，幼児期というのは，あらゆる可能性を内臓した未成熟の時期である。Gesell, A. は，乳幼児について，つぎのように述べている。生後一年の間の子どもの心身の発達は，生涯のどの時期よりもめざましく，難破船の水夫が波間に投げ出されているように，生れたばかりの子どもは，地上に裸身のままでころがっている。しかし，このよるべない存在の子どもは，僅か一年の間に二本の足で立ち，歩き，のぞいたり，捜しまわったりするようになる。また幼児は，さまざまな感情をもち，考え，いろいろな人と交わり，複雑な一人の人間に成長していく。すなわち，子どもは，誕生から幼児期にかけては，心理学的にも生物学的にも未成熟な時期である。

幼児が，心身ともに未成熟であることから，その研究や教育の面でさまざまな問題が起きてくる。幼児が環境に恵まれているか否かということは勿論のこと，未成熟であるという条件から，身体的・運動的障害，視聴覚障害，言語障害，内臓諸器官の疾患，神経的・行動的障害，知的障害，および栄養不良などの諸欠陥が起こり，将来心身の異常的諸徴候へと発展していく。これらの諸欠陥は，先天性のものもあれば，出生から幼児期までに発生したものもある。それらの欠陥は，ある程

* 本研究は，日本女子大学村山貞雄教授を研究代表者とする，昭和58年度文部省科学研究費（総合研究部門）による「幼児の成長と保育課程の調査」の一環として，「社会的発達」と「感情的発達」の領域を分担したものの一部である。本領域についての研究は，日本女子大学児玉省名誉教授を班長に，北海道大学三宅和夫教授，岡山大学秋山和夫教授らとの共同によるものである。

度予防の可能なものであり，また予防できないにしても幼児の期間内に治療できるものもある。幼児期に見られる障害は，心理的なものは勿論のこと，たとえ身体的なものであっても，心理学的な理解と指導が必要である。

ところで，心理学の領域で，幼児・児童を対象とした研究の数は多く，多方面にわたっている。続　有恒（1959）は，日本心理学会の発表論文抄録に掲載された論文を，研究に用いた被験者の年齢段階と研究領域について検討し，つぎの領域に分類している。

(1)　幼児・児童の行動のさまざまな側面を，かれらの行動の解明のために研究する領域で，この種の研究は，幼児・児童が研究の被験者として用いられているというより，かれら自身が研究の対象となっている。

(2)　幼児・児童は，一つの存在として科学的に捉えるべき「相手」であると同時に，教育的，あるいは治療的立場から働きかけていくべき「相手」でもある。すなわち，幼児・児童に対していかに働きかけていくべきかという課題を追求していく領域。

(3)　幼児・児童の研究は，必然的に行動の規定要因の分析を含むか，あるいは，それに関連するものであるが，この領域は，とくに幼児・児童の行動を規定する外部的条件を明らかにしようとする領域。

(4)　研究の一段階として幼児・児童だけが被験者になることもあるが，多くの場合，他の発達段階にある人間とともに研究の対象とし，その研究の目的は，一般的発達原理の発見にある。

(5)　幼児・児童を含めた「人間一般」の行動の法則を見出すため，かれらをその心身上の特性から人間一般の標本として，研究の便宜から利用する領域。

(6)　最後は，幼児・児童を対象にした研究の方法を検討する領域。

このように，幼児を対象とする心理学的研究は，広範囲にわたっている。われわれは，続が指摘した (1), (2), (3), (6)の立場にたって，とくに人の人格形成の中核となり，また幼児の教育や治療にあたって，理解しておかなければならない「社会的・感情的発達」について調査研究を行った。

〔I〕「社会的・感情的発達」を調査するための質問項目

本研究は，幼児の「社会的・感情的発達」を明らかにするための調査研究である。
ところで，調査するための質問項目の作成にあたっては，社会性とは何であるか，あるいは感情とは何であるかといった概念を規定し明確にしなければならない。子どもの発達や教育やしつけに関連して，社会的発達とか感情的発達という言葉ほど頻繁に用いられている言葉は少ない。ところが，社会性や感情とは何であるかということを規定することは，きわめて困難であり，またこの二つの概念は明確に区別できるものでもない。

そこで，われわれは児玉（1963）の説に賛同し，児玉が作成した調査項目を用いることにした。すなわち，社会性とか感情といった概念を規定するよりも，現在出版されている児童心理学の専門書や研究論文や各種テストなどに取り上げられている社会性や感情に関係のある項目を参考に調査

項目を作成した。そして社会性と感情についての概念規定は，これらの専門書，研究論文，および心理テストなどから取捨選択された項目を一応社会性や感情を表わすもの，あるいはそれらの一部を把握する方向を示すものと想定して，社会性とは，また感情とは何であるか，これらの項目に基づいて操作的に定義し考察しようと試みた。

そこで社会的発達を調査するための質問項目は，末尾に掲載した〔資料―Ⅰ〕の調査用紙に示されたように，社会性項目として，Ⅰ　接触（社会性），Ⅱ　依存（利用），Ⅲ　愛情（同情，好意，親切），Ⅳ　支配（指導，命令），Ⅴ　従順（協調），Ⅵ　拒否（抵抗，敵意，からかい），Ⅶ　競争（自慢），Ⅷ　模放，Ⅸ-1　責任を負う（規則を守る），Ⅸ-2 自律性（自我意識）など10特性からなっている。そして，各々の社会性項目を対大人関係と対子供関係（大項目）に分け，さらに，各々の特性毎に2～12の場面（小項目）を設定した。すなわち，質問項目は10特性と101の場面を設定し，各々「いつも」「ときどき」「ほとんどない」の3件法で回答を求めるように構成されている。

つぎに，感情的発達を調査するための質問項目は，感情項目として，Ⅰ　喜悦（明朗），Ⅱ　愛情（親切），Ⅲ　不機嫌（陰気），Ⅳ　嫌い，Ⅴ　怒り，Ⅵ　恐怖，Ⅶ　過敏，Ⅷ　恥しがる，Ⅸ　嫉妬　Ⅹ　くやしがる，Ⅺ　さびしがる，Ⅻ　かなしがる，ⅩⅢ　よく泣く（泣き虫），などの特性からなり，さらに，各々の特性毎（大項目）に，3～12の場面（小項目）を設けた。すなわち，調査項目は，13の特性（大項目）と83の場面（小項目）からなり，各々「いつも」「ときどき」「ほとんどない」の3件法で回答を求めるように構成されている。

〔Ⅱ〕 幼児を対象とする研究法の問題点

前述のように，幼児は心理的にも生理的にも未成熟である。それらのことと関連して，幼児の研究にあたっては，研究方法上の制約がある。

言語能力の未発達な幼児は，研究者が与える教示を理解することは困難である。かれらに何らかの課題を与え解決を求める場合，その解決に必要な教示は言語によって与えられる。その教示が正しく理解できなければ妥当性の高い結果を得ることは困難である。たとえ幼児が，その教示が理解できたとしても，内的変化を表現する言語を持たなければ，妥当性・信頼性の高い回答を期待することは不可能である。

また，幼児は言語能力がある程度発達しても課題意識が欠如しているため，与えられた条件に従って作業することは困難である。課題解決のための作業が幼児にとって興味のあるものであれば，積極的に反応を示すが，興味のないものに対しては飽きてしまう。また課題意識の低い幼児にとっては，与えられた作業を指示された条件に従って遂行することは困難である。さらに，幼児は心身ともに未成熟のため，長時間にわたって課題解決のための作業を強制してはならない。幼児を研究する場合，研究することによって現在の心身の健康を損ったり，心身の発達に悪影響を及ぼすような研究は避けなければならない。このようなことから，幼児の研究にあたっては，研究の内容のみならず，方法論的にも幾多の制約がある。

われわれは，幼児の「社会的・感情的発達」に関して，質問紙法による調査研究を試みた。ところが質問紙法による調査法は，かなり高度の言語的理解力や表現力が要求される。したがって，言語能力の未発達な幼児に直接調査を実施することは不可能である。われわれは，幼児と生活を共にし，日頃幼児をつぶさに観察している父母と幼稚園・保育園の教師の二者に対して，幼児についての質問紙法による調査を行い，間接的に回答を求めることにした。このような調査法を用いることによって，幼児の行動特性についてより客観的な資料を収集することができるのみならず，家庭と幼稚園・保育園といった環境の変化によって幼児の行動の変容をも明らかにすることができよう。

〔Ⅲ〕 調査対象と調査期間

(1) 調査対象

わが国における幼稚園（昭和58年5月1日現在，3歳児以上），および保育園（昭和58年4月1日現在，0歳児以上）に在園する都道府県別・地方別乳幼児数は表-Ⅰに示したとおりである。

われわれは，これら全国の幼稚園・保育園に在園する幼児5,000人を調査の対象児とした。調査は，各地方毎に調査実施担当者＊を決めて調査を委嘱した。これら調査実施担当者の意見や各地方別園児数を参考にして，予定調査対象園児5,000人を各地方別に，おおよその比例配分をした。当初予定した各地方別調査対象児数は，表-Ⅰに示したとおりである。

調査用紙は，一括して各地方別調査実施担当者に送付した。そして，調査にあたっては努力目標として，つぎのような条件を守るように依頼した。

(1) 各地方毎に全県にわたるように努力する。

(2) 県別，年齢別，幼稚園・保育園別調査対象園児数は，表-Ⅰの文部省「学校基本調査速報」（昭和58年度），および厚生省「社会福祉行政業務報告」（昭和58年度）に報告された園児数などを参考に，おおよそ比例配分するように努める。

(3) 各都道府県において調査を依頼する幼稚園や保育園は，フェイス・シートの（0.6）居住地域別，および（0.7）居住市町村別などを参考に無差別に選定する。

(4) 各園では，3歳児，4歳児，5歳児，6歳児各クラスの中から10～30人程度の園児を無差別に選択し，調査用紙の「注意」（資料―Ⅰを参照）に従って回答する。

(5) (4)で調査の対象に選定された園児の父母に，教師と同じ調査用紙（ただし，フェイス・シートは，教師記入欄―A欄―と，父母記入欄―B欄―とは別であるが，「社会的発達」と「感情的発達」についての質問項目と回答法は両者とも同一である）を配布し，調査用紙の「注意」に従って

＊ 各地方別調査実施担当者
北海道地方：北海道大学　三宅和夫教授。　東北地方：尚絅女学院短期大学　野呂アイ教授。　関東地方：幼児体育研究所　亀谷正美所長。　東京都：日本女子大学　児玉　省名誉教授。　中部地方：一宮女子短期大学　三神広子教授。　近畿地方：大阪松蔭女子大学　西本　脩教授。中国地方：岡山大学　秋山和夫教授。　四国地方：香川大学　佃　範夫教授。　九州地方：鹿児島大学　島田俊秀教授　鹿児島大学　松田君彦助教授。　九州大学　大坪治彦助手。

〔表-Ⅰ〕 都道府県別幼稚園・保育園在園児数，調査対象予定園児数

地方別	県名	幼稚園児数	保育園児数	全体	調査対象予定園児数
北海道		86,293	63,505	149,798	300
東北	宮城	45,262	18,287	63,549	
	福島	42,708	21,716	64,424	
	岩手	20,600	25,731	46,331	
	青森	18,822	38,363	57,185	
	山形	18,746	17,050	35,796	
	秋田	16,157	19,617	35,774	
(計)		162,295	140,764	303,059	400
東京		201,952	154,733	356,685	600
関東	神奈川	165,921	124,150	290,071	
	千葉	115,188	64,572	179,760	
	埼玉	147,146	56,266	203,412	
	茨城	53,908	33,941	79,423	
	群馬	37,054	38,612	75,666	
	栃木	45,482	25,368	70,850	
(計)		564,699	342,909	907,608	1,000
中部	愛知	107,099	157,322	264,421	
	静岡	87,472	48,254	135,726	
	岐阜	34,633	50,406	85,039	
	長野	18,090	68,976	87,066	
	山梨	11,052	21,757	32,809	
	福井	10,307	25,307	35,614	
	石川	10,966	46,473	57,439	
	富山	12,735	32,813	45,548	
	新潟	24,253	67,012	91,265	
(計)		316,607	518,320	834,927	800
近畿	大阪	166,491	102,620	269,111	
	京都	44,875	47,039	91,914	
	兵庫	96,712	65,658	162,370	
	滋賀	21,127	20,119	41,246	
	奈良	28,322	18,192	46,514	
	和歌山	14,717	22,225	36,942	
	三重	26,646	38,251	64,897	
(計)		398,890	314,104	712,994	700
中国	広島	49,907	57,639	107,546	
	鳥取	8,148	16,780	24,928	
	島根	11,493	17,949	29,442	
	岡山	36,079	35,115	71,194	
	山口	28,004	28,635	56,639	
(計)		133,631	156,118	289,749	300
四国	香川	23,579	22,619	46,198	
	徳島	16,374	16,127	32,501	

地方別	県名	幼稚園児数	保育園児数	全体	調査対象予定園児数
	愛媛	28,254	32,544	60,798	
	高知	7,017	29,487	36,504	
（計）		75,224	100,777	176,001	400
九州	福岡	90,558	79,442	170,000	
	佐賀	14,617	18,354	32,971	
	長崎	31,187	30,211	61,398	
	熊本	23,192	45,230	68,422	
	大分	21,621	18,896	40,517	
	宮崎	17,736	28,936	46,672	
	鹿児島	30,443	28,532	58,975	
	沖縄	23,908	18,756	42,664	
（計）		253,262	268,357	521,619	500
総計		2,192,853	2,059,587	4,252,440	5,000

回答を求める。

(6) 父母に配布した調査用紙の回答が終り次第，各々の園で回収し，教師回答の調査用紙と父母のそれを併せ，各地方調査担当者に送付するか，または担当者が直接回収する。

(7) 各地方の調査担当者は，各地方別の回答済み調査用紙を回収し，鹿児島大学教育学部心理学教室宛に送付する。

(2) 調査期間

調査用紙は，昭和58年12月中旬，各地方別調査担当者に配送した。そして，昭和59年３月31日までに調査を終了した対象について集計・分析を行った。

〔Ⅳ〕 集計・分析の方法と対象児数

回収した調査用紙は，本調査の集計のために設計し印刷したＯＣＲカード（〔資料－Ⅱ〕末尾掲載）に転記して鹿児島大学大型計算機にインプットし，計算機を活用して集計・分析結果の正確度，妥当性，信頼性を高めるように努めた。

調査対象は，当初全国の幼稚園・保育園に在園する4,252,440人の幼児の中から，約0.1％にあたる園児を対象にして調査を実施する予定であった。ところが調査不能地方，調査は実施したが教師と父母の回答が揃わなかったもの，フェイス・シートの記入もれ，および調査項目の記入もれ（10～15項目位の記入もれがあったものは除く）などは除外し，最終的には図－Ｉに示したように2,998人（当初予定した園児数に対する回収率は約75％程度で全国園児数4,252,440人の約0.07％にあたる）であった。これら2,998人の園児について回答の得られた幼稚園・保育園の教師と父母の調査結果5,996人について，大型計算機を用いて集計・分析を行った。

〔V〕 集計・分析の結果

本報告は，調査用紙のフェイス・シートの教師の記入欄(A)の（0･2）から（0･9）までと，父母の記入欄(B)の（1･1）から（1･8）までの結果の単純集計の報告である。

これらの結果は，図-Ⅰから図-16までに図示したとおりである。

まず，図-1の年齢別対象児数は，6歳児942人（34.1%），5歳児922人（30.8%），4歳児661人（22.0%），3歳児442人（14.7%），2歳児と年齢不明児で31人（1.0%）となり，3歳児から6歳児までの「社会的・感情的発達」に関する各質問項目についての回答の発達的変化について，有意な統計的分析が可能である。

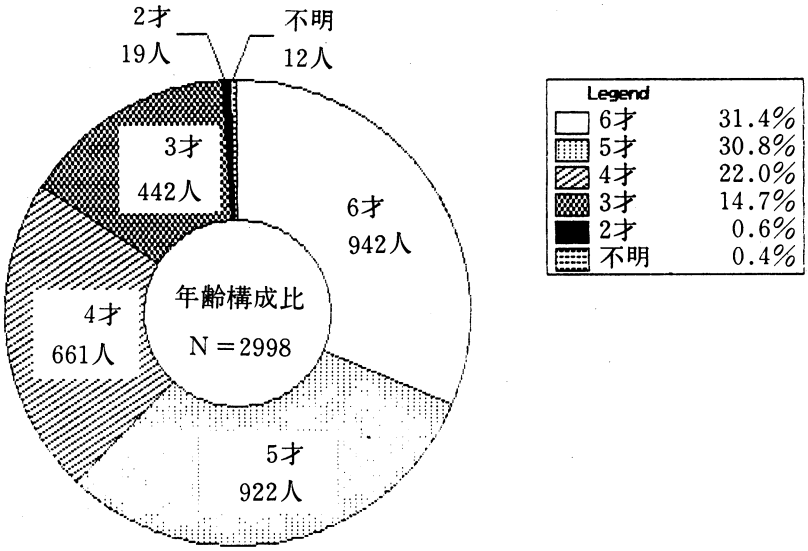

図-1　年齢別対象児数と構成比

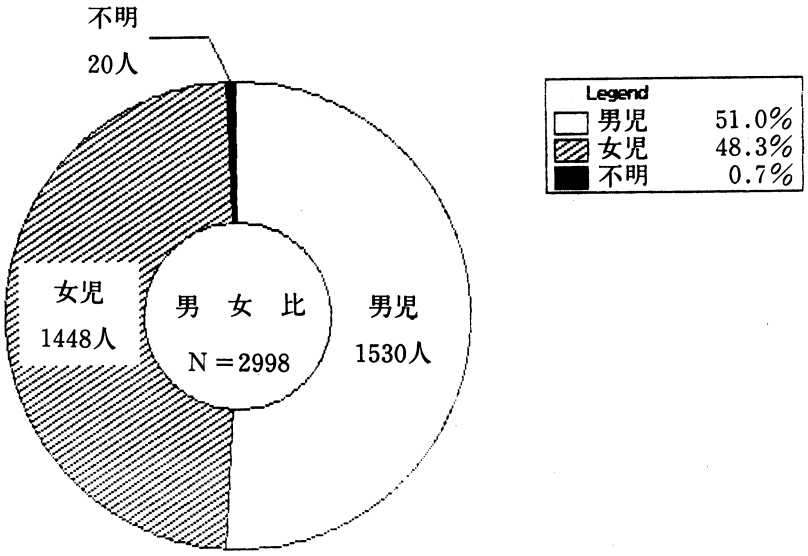

図-2　男女別対象児数と構成比

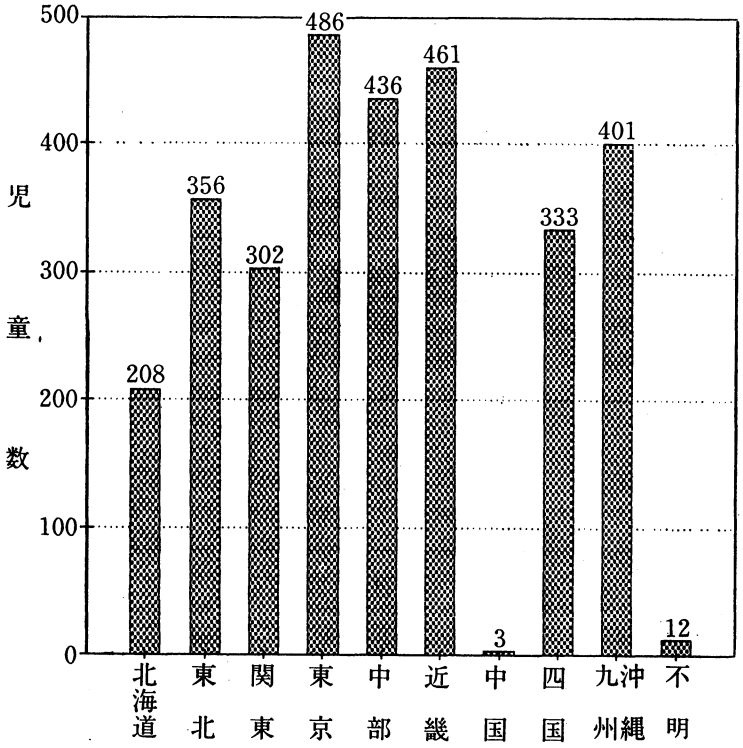

図-3　居住地方別対象児数

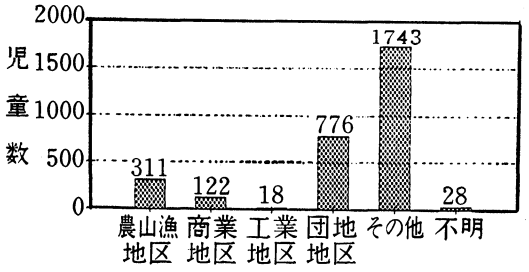

図-4　居住地域別対象児数

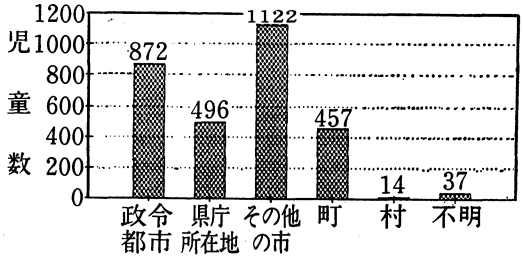

図-5　居住市町村別対象児数

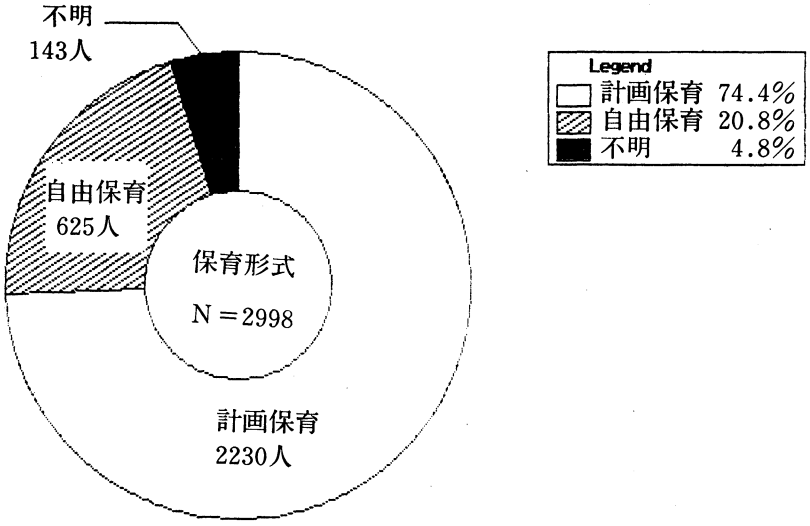

図-6　保育形態別対象児数と構成比

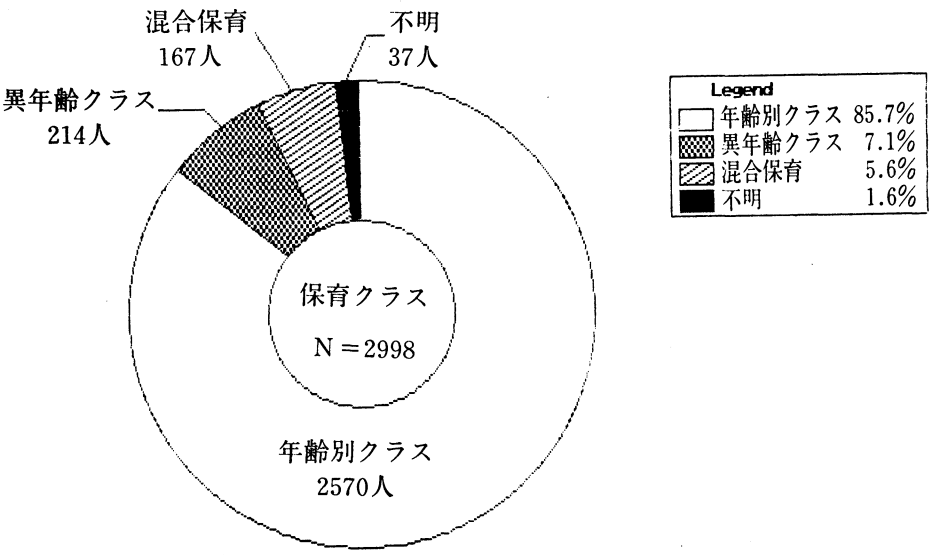

図-7　クラス編成形態別（同年齢児編成と異年齢児編成）対象児数と構成比

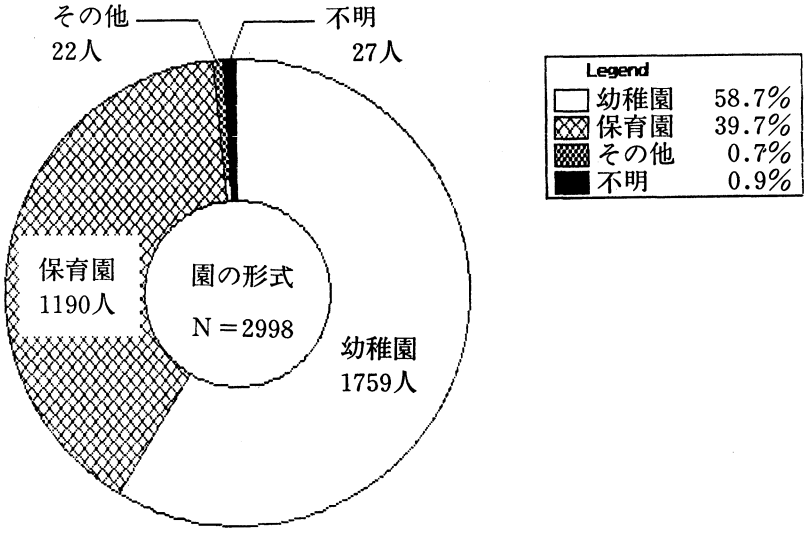

図-8　幼稚園，保育園別対象児数と構成比

男女別対象児数（図-2）は，男子1,530人（51.8%），女子1,448人（48.3%）とほぼ同数に近く性差について分析できる。

居住地方別対象児数（図-3）は，地方別の特徴を知るためほぼ有効な人数に達した。ただし，中国地方は，調査上の条件を充たしていない調査結果が多かったため，今回の集計から除外せざるを得なかった。居住地域別対象児数（図-4）は，「その他」に集中（1,743人），商業地区と工業地区の居住児数が著しく少なかった。居住市町村別対象児数（図-5）は，「村」の居住児がきわめて少なく（14人），他は適当な数といえよう。

つぎに，保育の形態の相違による対象児数（図-6）を見ると，一斉保育を重視している園に通

園している対象児が2,230人（74.4%），遊びを中心に幼児の欲求を尊重し自由保育を重視している園に通っている対象児が625人（20.8%）得られ，両者を比較するためには有効な人数に達しているため，昨今保育の現場で研究課題となっている，この種の問題に対する適切な解答が得られるものと思われる。

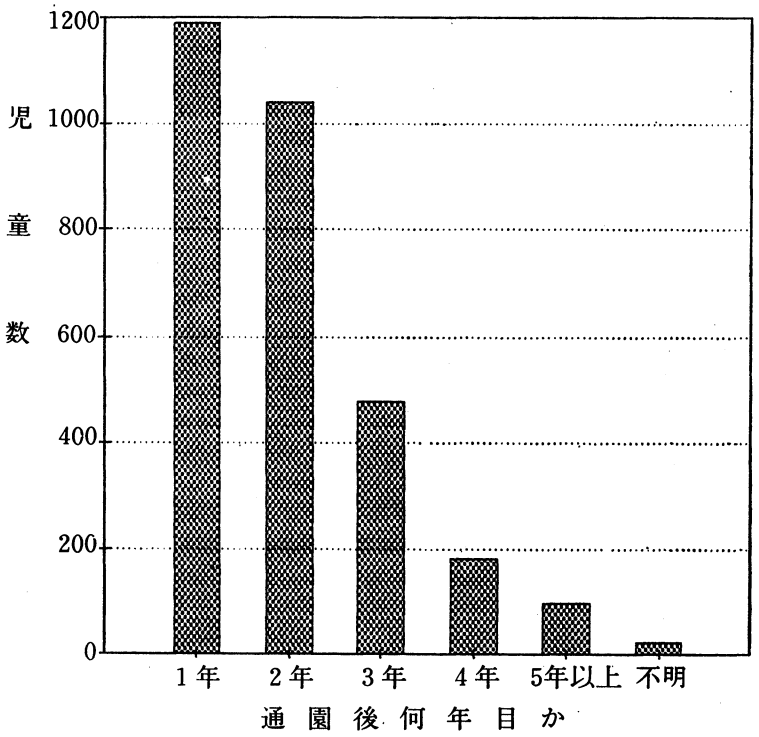

図-9　集団保育経験年数

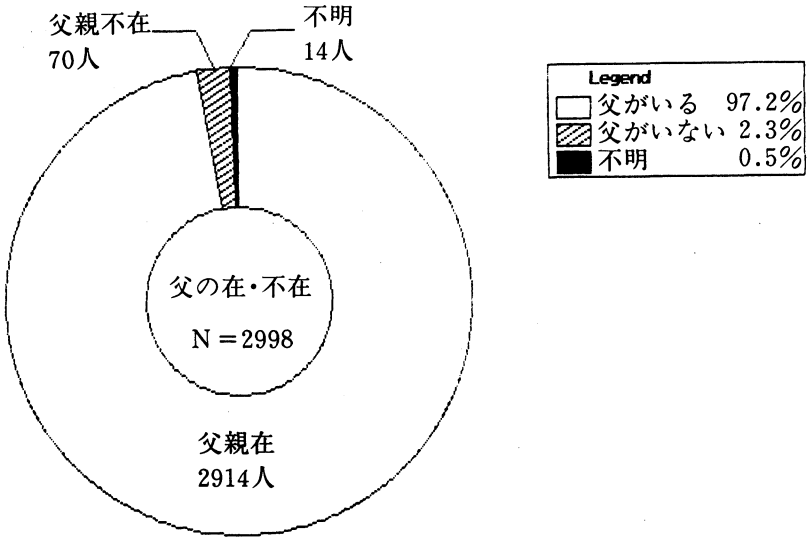

図-10　父親の在・不在別対象児数と構成比

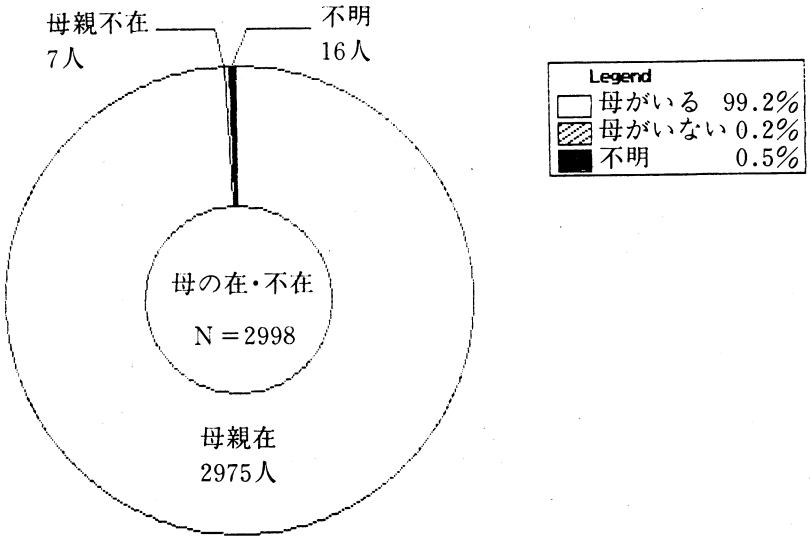

図-11　母親の在・不在別対象児数と構成比

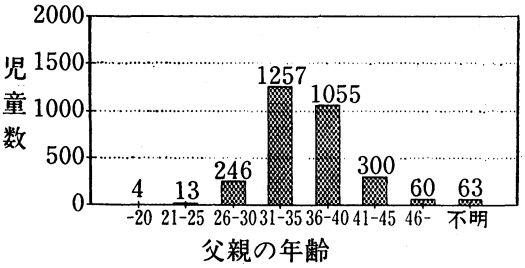

図-12　父親の年齢別対象児数

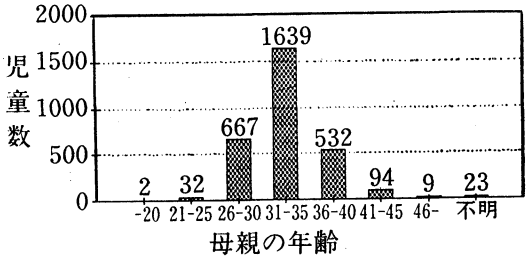

図-13　母親の年齢別対象児数

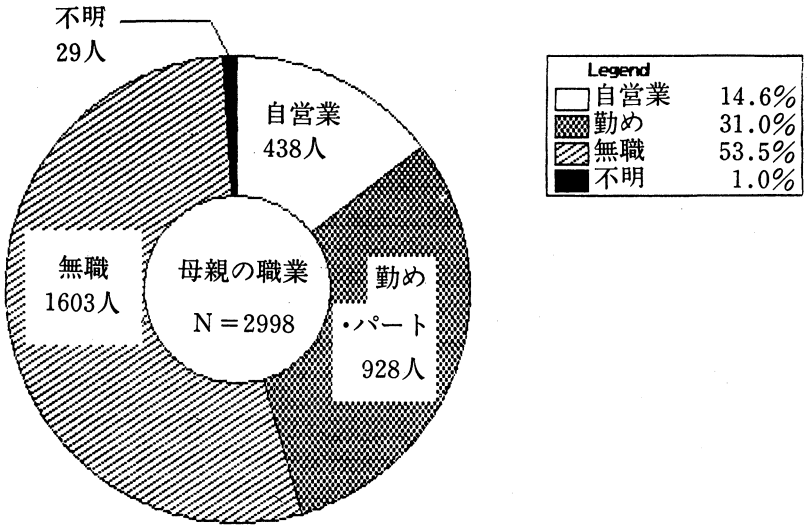

図-14　母親の職業別対象児数と構成比

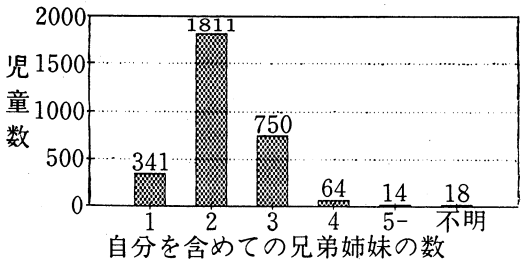

図-15　同胞数別対象児数

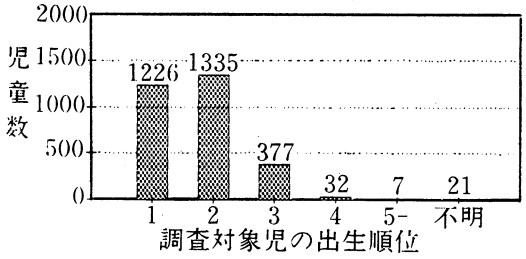

図-16　出生順位別対象児数

現在，保育の現場では，小学校などと同様に同年齢児によるクラス編成よりも，同胞数の少ない今日では，異年齢児によってクラスを編成し，兄姉や弟妹の経験をさせた方が望ましいといった議論がある。調査の結果（図-7）は，圧倒的に同年齢児によるクラス編成が多い（2,570人，85.7%）。しかし，異年齢児によって編成されたクラスに所属する対象児が214人（7.1%），両編成混合クラスが167人（5.6%）得られ，かなり有意な分析が可能であり，適切な示唆が得られよう。

幼児の保育は，幼稚園と保育園の何れが望ましいか，また，集団保育の経験が長ければ長いほど望ましいか否かといったことは，保護者は勿論，教育者，研究者，および行政側も大きな関心事であり，研究課題でもある。われわれは，これらの問題を「社会的・感情的発達」の側面から解明するため調査研究を実施した。その結果は，いずれも有効な回答数が得られ，今後のクロース集計の結果が期待されよう（図-8，図-9）。

つぎに，父親，母親の在・不在（図-10，図-11）の項目を設けたが，父親不在の対象児が70人，母親不在の対象児が7人得られ，父親不在の家庭が多いことが注目される。

その他に，父親と母親の年齢（図-12，図-13），母親が有職か否か（図-14），対象児の同胞数（図-15），および出生順位（図-16）など幼児の「社会的・感情的発達」に影響を及ぼすであろうと予想される要因について，今後有効な集計・分析を行うために必要な対象児の数は一応回収できたと思われる。

〔VI〕 結　　論

本研究は，幼児の社会的・感情的発達に関する研究（1）で，とくに方法論を中心に報告した。まず，幼児の「社会的・感情的発達」に関する研究の教育的意義，および心身共に未成熟・未発達な幼児の研究内容や研究方法上の制約や問題点について考察した。

それらの結果を基にして，幼児の「社会的・感情的発達」を究明するための質問項目や調査方法を検討して，全国の幼稚園や保育園に在園する2,998人の園児の教師と父母を対象に質問紙法による調査を実施した。そして本年度は，幼児の社会的・感情的発達の年齢の上昇（3歳～6歳）に伴なう変容の過程を研究Ⅱ（松田1985），および研究Ⅲ（大坪1985）で報告する。

さらに，本論文においては，幼児の社会的・感情的発達にもっとも大きな影響を及ぼすであろうと予想される諸要因，すなわち，男女差，生活環境（居住地域など），保育の形態（幼稚園と保育

園，保育法，クラス編成など)，集団保育の経験年数，家庭環境（父親と母親の在・不在，年齢，同胞数，出生順位，母親の職業）などの要因を明らかにしていくために，統計学的・推計学的処理を行い，妥当性，信頼性の高い結果を得るため，また今後社会的発達と感情的発達との相関々係や因子分析などを行うために必要な対象児の数が得られたことの報告に留めたい。

参考・引用文献

(1) ゲゼル・山下俊郎訳（1966）「乳幼児の心理学」，19～20，家政教育社。
(2) 続　有恒（1959）「児童心理学研究法（波多野他編著　児童心理学ハンドブック）」，839～869，金子書房。
(3) 児玉　省（1963）「社会性発達（日本保育学会編　保育学年報1963年度版」，265～272。
(4) 島田俊秀（1970）「幼児研究の教育的意義，研究方法上の制約（山下他編著　幼児教育学全集第1巻 幼児教育の理論)」，217～221，小学館。
(5) 島田俊秀（1975）「児童心理学」，酒井書店。
(6) 島田俊秀（1977）「保育学の実験的研究（日本保育学会編著　保育学の進歩)」，276～286，フレーベル館。

謝　辞

本研究は，各地方別調査実施担当者を始め，調査の対象となった幼稚園・保育園の教師と幼児の父母，宮崎女子短期大学山口孝道教授，および鹿児島大学教育学部心理学選修生諸君の甚大な御協力を頂きました，ここに記して厚く御礼を申し上げます。

〔資料—I〕調査用紙

(1)

文部省科学研究費による幼児の成長と保育課程の調査

——社会的発達・感情的発達——

〔お　願　い〕

本調査は，幼児の社会的発達と感情的発達を調査し，今後の幼児の教育のあり方について参考にするものです。ご多忙のところ恐縮に存じますが，研究の目的を理解して頂き以下の項目にご回答くださいますようにお願い申しあげます。なお，この調査は，わが国における幼児の社会性や感情の発達的傾向を調査しようとするものであって，調査の対象となった幼児や幼稚園・保育園の内情などについてうんぬんするものではありません。ですから，調査の対象となった幼児が，日頃示している行動の特徴について，社会的発達・感情的発達の各調査項目に正しく，そしてもれなくご回答くださいますよう重ねてお願い申しあげます。

〔注　　意〕

本調査は，一人一人の幼児について担任の教師と父母の両方に記入して頂くものです。両方の調査結果が得られないと研究の資料として役立ちませんので，次の諸注意をよく理解した上でくれぐれもよろしくご協力頂きますようにお願い申しあげます。

(A) 幼稚園・保育園の先生方へのお願い

(1) おたくの園（幼稚園および保育園）の2歳児（保育園のみ），3歳児，4歳児，5歳児，6歳児を調査対象とし，それぞれの子供を日頃よく見ている先生方二人で相談して，それぞれの子供の示す社会的発達・感情的発達の全項目について，定められた方法に従って回答してください。

(2) この場合，おたくの園の同年齢の子供たちが示す全体的傾向を基準にし，それと比較して回答してください。

(3) 園の方で調査の対象となった幼児の父母に配布して調査をおこない，調査用紙を回収して頂くようお願いいたします。なお，調査用紙は，教師用と父母用は全く同じものです。

(4) 父母の調査用紙を回収する時に，記入もれがないかどうかをよく確かめてください。

(5) 回収したら幼稚園・保育園で記入した調査用紙綴を上に，父母の調査用紙綴を下にしてホッチキスでとめてください。

(B) 父母の皆さんへのお願い

(1) おたくの子供さんの日頃の行動や，父母の皆さんが感じていることを，ありのまま記入してください。

(2) 記入し終ったら，もう一度見直して，記入もれがないかどうかを確かめてください。

(3) 回答が終りましたら，すみやかに本調査用紙を園の担任の先生に届けてください。

＊ 御多忙のところ恐縮に存じますがくれぐれもよろしくご協力のほどをお願い申しあげます。

日本女子大学名誉教授　児玉　省
北海道大学教授　三宅和夫
岡山大学教授　秋山和夫
鹿児島大学教授　島田俊秀
鹿児島大学助教授　松田君彦

(2)

まず，下のA欄（園で記入），B欄（父母が記入），C欄（園で記入）の項目について答えてください。

●〔＿＿〕の中にはあてはまる事柄を記入し，〔　　〕の中に 1,2,……，のように選択肢のある項目については，あてはまるものを1つだけ選んで，選択肢の番号に○印をつけてください。

A欄……幼稚園・保育園で記入し（父母に配布する調査用紙には記入しない，B欄の幼児の氏名だけは記入してから父母に配布する），次の社会的発達・感情的発達の項目に回答する。

●幼児の氏名〔＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿〕　●生年月日〔昭和＿＿年＿＿月＿＿日〕　●調査年月日〔昭和＿＿年＿＿月＿＿日〕

(0.1)　調査対象児番号［＿＿＿＿］←この中には何も記入しないこと。

(0.2)　幼児の性別　〔1. 男　2. 女〕

(0.3)　満　年　齢　〔1. 6歳児　2. 5歳児　3. 4歳児　4. 3歳児　5. 2歳児〕

(0.4)　2歳児の場合は，2歳と何ケ月ですか。
〔1. 1～2ケ月　2. 3～4ケ月　3. 5～6ケ月　4. 7～8ケ月　5. 9～10ケ月　6. 11～12ケ月〕

(0.5)　居住地方別　〔1. 北海道　2. 東北　3. 関東　4. 東京　5. 中部　6. 近畿　7. 中国　8. 四国　9. 九州・沖縄〕

(0.6)　居住地域別　〔1. 農・山・漁村　2. 商業　3. 工業　4. 団地住宅　5. 団地を除く住宅〕

(0.7)　居住市町村別〔1. 政令都市　2. 1.以外の県庁所在都市　3. 1.と2.以外の市　4. 町　5. 村〕

(0.8)　貴　園　で　は〔1. 一斉計画保育を重視している　2. 自由保育を重視している〕

(0.9)　調査の対象になった園児のクラスは〔1. 年齢別（ヨコ割）保育　2. 異年齢別（タテ割）保育　3. 1と2の混合の保育〕

(1.0)　貴　園　は　〔1. 幼稚園　2. 保育園　3. その他〕

B欄……父母が記入し，次の社会的発達・感情的発達の項目に回答してください。ただし上のA欄には父母は記入しないこと。

●幼児の氏名〔＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿〕←この欄には園の方で幼児の氏名を記入してから父母に配布すること。

(1.1)　お子さんは幼稚園，または保育園に通園し始めてから何年目ですか。
〔1. 1年目　2. 2年目　3. 3年目　4. 4年目　5. 5年以上〕

(1.2)　子供の父親はいますか。〔1. います　2. いません（母子家庭）〕

(1.3)　父親の年齢〔1. 20歳未満　2. 21～25歳　3. 26～30歳　4. 31～35歳　5. 36～40歳　6. 41～45歳　7. 46歳以上〕

(1.4)　子供の母親はいますか。〔1. います　2. いません（父子家庭）〕

(1.5)　母親の年齢〔1. 20歳未満　2. 21～25歳　3. 26～30歳　4. 31～35歳　5. 36～40歳　6. 41～45歳　7. 46歳以上〕

(1.6)　母親の職業〔1. 自営満　2. おつとめ（パートも含む）　3. 無職〕

(1.7)　お子さんは何人ですか。〔1. 1人　2. 2人　3. 3人　4. 4人　5. 5人以上〕

(1.8)　調査の対象となったお子さんは上から何番目ですか。
〔1. 1番目　2. 2番目　3. 3番目　4. 4番目　5. 5番目以上〕

C欄……幼稚園・保育園のほうで，父母に配布する調査用紙綴には，“2. 父母が記入”の 2. に○印をつけてから配布し，園で回答するものには1.に○印をつけてください。

(1.9)　この調査用紙は誰が記入しましたか。〔1. 幼稚園・保育園で記入　2. 父母が記入〕←園の方で回答してから配布する。

〔注　　意〕

幼稚園・保育園で，父母に調査する調査用紙綴は，B欄の幼児の氏名を〔＿＿＿＿＿＿〕の中に記入し，C欄の“2.父母が記入”の2.に○印をしてください。また園で回答する調査用紙には1.に○印をつけてください。

(3)

社会的発達

幼児の社会性は，あらゆる対人関係を包含しています。そして，すべての社会性項目を対大人関係，対子供関係に分けてあります。

次の社会性項目について，まずⅠのA，B，Cの内から一般に該当するものに○印をつけて下さい。次にⅡの1,2,3,…,の具体的な問題を一問ごとにみて，右の欄のa，b，cの内から該当するものを選び○印をつけて下さい。（ⅡのA，b，cはⅠのA，B，Cにかかれている内容と同じ意味です。）

〔記入例〕

社会性項目		Ⅰ	Ⅱ		いつも	時々	ほとんどない
Ⅰ 接触（社交性）	対大人	Ⓐ ……	⋮		a	b	c
		B ……	3	大人に声をかける	a	ⓑ	c
		C ……	⋮				
	対子供	A ……	⋮				
		Ⓑ ……	12	他の子に話をする	a	ⓑ	c
		C ……	⋮				

社会性項目		Ⅰ	Ⅱ		いつも	時々	ほとんどない
Ⅰ 接触（社交性）	対大人関係	A 大人のそばに寄り，よく話をする B 時々話かけている C あまりそばに寄らず，話もほとんどしない	1	大人の方へ近づくだけ，そばに立つだけ	a	b	c
			2	大人にさわったり，押したりする	a	b	c
			3	大人に声をかける	a	b	c
			4	大人に何かを見せる	a	b	c
			5	大人に話しかけてくる	a	b	c
			6	大人の注意をひくため，派手にふるまう	a	b	c
			7	大人の注意をひくため，いたずらをする	a	b	c
	対子供関係	A 他の子供のそばに寄りよく遊ぶ B そんなに積極的ではない C ほとんど友達のそばにはいかず，遊ばない	8	他の子供の方へ近づくだけ，そばに立つだけ	a	b	c
			9	他の子にさわったり，押したりする	a	b	c
			10	他の子供に声をかけたり話をする	a	b	c
			11	他の子供に何かを見せる	a	b	c
			12	他の子供とよく遊ぶ	a	b	c
			13	他の子供の遊びをじっと見ている	a	b	c
			14	子供たちのグループの外にいる	a	b	c
			15	特別に親しい友だちがいる	a	b	c
Ⅱ 依存（利用）	対大人関係	A 大人にとても依存する B 時々依存する C ほとんど依存しない	16	大人にほとんどいつも教えてもらう	a	b	c
			17	けんかで大人にさばきを求める	a	b	c
			18	大人の賛成を求める	a	b	c
			19	大人に着るのを手伝ってもらう	a	b	c

(4)

社会性項目		I		II	いつも	時々	ほとんどない
			20	大人に道具，遊具の扱いを手伝ってもらう	a	b	c
			21	大人に食べさせてもらう	a	b	c
			22	大人に甘えてなぐさめてもらう	a	b	c
	対子供関係	A 他の子供にとても依存する B 時々依存する C ほとんど依存しない	23	他の子に教えてもらう，助けてもらう	a	b	c
			24	けんかで他の子のさばきを求める	a	b	c
			25	他の子の賛成を求める	a	b	c
			26	他の子に着物を着るのを手伝ってもらう	a	b	c
			27	他の子に道具遊具の扱いを手伝ってもらう	a	b	c
			28	他の子に食べるのを手伝ってもらう	a	b	c
III 愛情（同情）（好意）（親切）	対大人関係	A 大人によく愛情を示す B そんなに積極的でない C ほとんどみられない	29	大人に愛情的にふるまう（とびついたり，その他の振舞で）	a	b	c
			30	大人に手伝いを申し出る	a	b	c
			31	大人が怪我なんかするといたわりをいう又は助けようとする	a	b	c
			32	大人が困っていると同情する	a	b	c
	対子供関係	A 他の子によく愛情を示す B そんなに積極的でない C ほとんどみられない	33	他の子供に物を分けてやる（お菓子や玩具など）	a	b	c
			34	他の子供を手伝ってやる，手伝いを申し出る	a	b	c
			35	他の子供が倒れたり，怪我をしたら助けてやる	a	b	c
			36	悲しんでいる子供をなぐさめてやる	a	b	c
			37	他の子供，特に小さい子供をかばいかわいがる	a	b	c
			38	新入りの子供を引っぱって仲間に入れてやる	a	b	c
			39	生き物をかわいがる	a	b	c
IV 支配（指導）（命令）	対大人関係	A 大人をよく支配する B 時々支配する C ほとんどしない	40	大人にいいつける（一緒に来て！ あれをやって！ 等）	a	b	c
			41	大人をしかる，大人に　だめ！などと批判する	a	b	c
	対子供関係	A すべて他の子供の先に立って率先して行う B 時々先に立つ C ほとんどやらない	42	他の子供に命令する	a	b	c
			43	他の子を誘って新しい遊びを始める	a	b	c
			44	他の子の上に立って，ひっぱっていこうとする	a	b	c
			45	他の子のお手本になるように振るまう	a	b	c
			46	他の子にじゃまされたとき，その子に静かに言ってなだめる	a	b	c
			47	他の子のあやまりやまちがいを指摘する	a	b	c
			48	大人に言いつけず，他の子のあやまりを訂正してやる	a	b	c
V 従順（協調）	対大人関係	A よく人の言うことを聞く B まあ中位である C ほとんど聞かない	49	大人の言うことによく服従する	a	b	c
			50	大人の言うことに応じてよく協調する	a	b	c
			51	大人の手伝いを素直に受ける	a	b	c

(5)

社会性項目		I		II	いつも	時々	ほとんどない
	対子供関係	A よく他の子供の言うことを聞く B まあ中位である C ほとんど聞かない	52	他の子の言うことに従う	a	b	c
			53	相手のやることに応じてよく協調する	a	b	c
			54	自分から積極的に他の子供を手伝う	a	b	c
Ⅵ 拒否（抵抗）（敵意）（からかい）	対大人関係	A 大人によく抵抗する B 時々抵抗する C ほとんどしない	55	大人の言いつけに口答えしてやらない	a	b	c
			56	大人の言いつけを聞かないで他所へ行く	a	b	c
			57	大人の言いつけを反対はしないがやらない	a	b	c
			58	大人に対して悪態をつく	a	b	c
			59	大人をぶったり，物をこわしたり，かんしゃくをおこす	a	b	c
	対子供関係	A 他の子供をよく拒否する B 時々拒否する C ほとんどしない	60	他の子の言うことに従わない	a	b	c
			61	他の子の言うことを無視する	a	b	c
			62	他の子に対して悪態をつく	a	b	c
			63	他の子をぶったり，つかんだりしてけんかする	a	b	c
			64	他の子のしていることをじゃまする	a	b	c
			65	新入りの子をいじめる	a	b	c
			66	他の子と一緒にすることを拒否する	a	b	c
			67	他の子の身体的な接触をいやがる	a	b	c
			68	他の子をからかう	a	b	c
			69	友達からバカにされたり，からかわれたりする	a	b	c
Ⅶ 競争（自慢）	対大人関係	A 大人によく自慢する B 時々する C ほとんどしない	70	大人とよく競争し又は大人に自慢する	a	b	c
			71	自分のしたことを大人にみてもらいたがる	a	b	c
			72	大人に自分のことを得意に話す（したこと，作った物など）	a	b	c
	対子供関係	A 他の子といろいろのことでよくはりあう B 時々する C ほとんどしない	73	他の子に自慢して話す，又は競争する	a	b	c
			74	他の子と大人の注意をひくことではりあう	a	b	c
			75	他の子と持ち物，遊具，場所とりではりあう	a	b	c
			76	自分がまけると泣く	a	b	c
Ⅷ 模倣	対大人関係	A よく大人のまねをする B 時々する C ほとんどしない	77	大人の口まねをする，言ったことをまねる	a	b	c
			78	大人のすることをまねる	a	b	c
			79	大人の着物の着方をまねる	a	b	c
			80	ごっこ遊びの大人の役をする	a	b	c
			81	大人の歩き方や態度をまねる	a	b	c
	対子	A よく他の子のまねをする	82	他の子の言葉をまねてくり返す	a	b	c
			83	他の子のしたことや笑いをまねる	a	b	c

(6)

社会性項目		I	II		いつも	時々	ほとんどない
	供関係	B　時々する C　ほとんどしない	84	ごっこ遊びで子供の役をする	a	b	c
			85	他の子の食べ方や食物をまねる	a	b	c
Ⅸ-1 責任を負う (規則を守る)	対人関係（子供・大人を含む）	A　当番や規則をよく守る B　守ったり守らなかったりである C　ほとんど守らない	86	大人がいなくとも決まったことをする	a	b	c
			87	禁止されたことはしない	a	b	c
			88	あやまちをしたらあやまる	a	b	c
			89	あやまちをして言訳をいう	a	b	c
			90	きめられた当番等をする	a	b	c
			91	きまりを守る（家での決まり，遊びのルール等）	a	b	c
			92	自分の番を待っている	a	b	c
			93	すじが通れば，いつでも自分の持っている玩具等を手ばなす	a	b	c
			94	いいつけられたことを一人でする	a	b	c
			95	自分のことを責任をもってする	a	b	c
			96	自分の持ち物の片付けができる	a	b	c
			97	言われたように帰ってくる	a	b	c
Ⅸ-2 自律性 (自我意識)	対人関係（子供・大人を含む）	A　自分のことは責任を持って何でも一人でできる B　時々できる C　ほとんど何もやらない	98	自分で着物の脱ぎ着ができる	a	b	c
			99	自分のことを名前でなく，ぼく，私という	a	b	c
			100	自分は男の子，女の子と言い出す	a	b	c
			101	同性の子とだけ遊ぶ	a	b	c

(7)

感情的発達

次の感情項目について，まずⅠのA，B，Cの内から一般に該当するものに○印をつけて下さい。次にⅡの1, 2, 3, ……,の具体的な問題を一問ごとにみて右の欄のa，b，cの内から該当するものを選び○印をつけてください。（ⅡのA，b，cはⅠのA，B，Cにかかれてある内容と同じ意味です）。なお，記入方法は社会的発達と全く同じです，社会的発達の記入例を参考にしてください。

感情項目	Ⅰ	Ⅱ		いつも	時々	ほとんどない
Ⅰ 喜悦（明朗）	A いつもうれしそう B 時々うれしそう C ほとんどうれしそうな顔をしたことがない	1	よくできた時，ほめてもらった時，うれしそう	a	b	c
		2	好きなものをもらったとき	a	b	c
		3	遊んでいるとき	a	b	c
		4	好きなものを作っているとき	a	b	c
		5	親や先生にあったとき	a	b	c
		6	よい服を着たとき	a	b	c
Ⅱ 愛情（親切）	A よく愛情を示す B 時々愛情を示す C ほとんど愛情を示さない	7	妹や小さい子をかわいがる	a	b	c
		8	動物，植物，花などをかわいがる	a	b	c
		9	人が困っているときに助けてやる	a	b	c
		10	人形をかわいがる	a	b	c
		11	友達に物をやったり，手伝ったりする	a	b	c
		12	親や先生に親切である	a	b	c
		13	人が倒れたり，怪我をするといたわる	a	b	c
		14	生き物をかわいがる	a	b	c
Ⅲ 不気嫌（陰気）	A いつも不気嫌 B 時々不気嫌 C ほとんど不気嫌なことはない	15	ほとんどいつも不気嫌	a	b	c
		16	本を読め，勉強しろ，おけいこをしろと言われたとき	a	b	c
		17	怒られたとき	a	b	c
		18	遊び友達がいないとき	a	b	c
		19	自分の願いをかなえてくれないとき，思いどおりにならないとき	a	b	c
		20	体の調子が悪いとき	a	b	c
		21	何が気にいらぬとすぐすねて不気嫌になる	a	b	c
Ⅳ 嫌い	A 嫌いな人や物がたくさんある B 少しある C ほとんどない	22	嫌いな友達がいる	a	b	c
		23	動物を嫌っている	a	b	c
		24	自分を怒る人，自分をいじめる者を嫌っている	a	b	c
		25	親でも先生でも時々嫌いと思っているようだ	a	b	c

(8)

感情項目	I	II		いつも	時々	ほとんどない
V 怒り	A いつも怒っている B 時々怒る C ほとんど怒ることはない	26	ほとんど毎日兄弟や友達に怒ってけんかする	a	b	c
		27	親や，先生に対して気にくわないと怒る	a	b	c
		28	自分ができないと怒る	a	b	c
		29	やっていることをじゃまされると怒る	a	b	c
		30	悪口を言われたりいじめられると怒る	a	b	c
		31	時間になっても食事にならないと怒る	a	b	c
		32	嫉妬してよく怒る	a	b	c
		33	他の子の持っているものをひったくる	a	b	c
		34	自分のものを他の子がとろうとすると荒々しくひっぱる	a	b	c
		35	自分のものが見えなくなると怒る	a	b	c
		36	約束が守られないと怒る	a	b	c
		37	自分のものを他の子が使うと怒る	a	b	c
VI 恐怖	A よくこわがる B 時々こわがる C ほとんどこわがらない	38	動物をこわがる	a	b	c
		39	暗いところをこわがる	a	b	c
		40	独りでいることをこわがる	a	b	c
		41	知らない人をこわがる	a	b	c
		42	高いところをこわがる	a	b	c
		43	いじめる子をこわがる	a	b	c
		44	けがや病気をこわがる	a	b	c
		45	一人で外出することをこわがる	a	b	c
		46	実際にないものを想像してこわがる	a	b	c
		47	大きな音をこわがる	a	b	c
		48	自分のしていることが大人にみつかるとびくびくする	a	b	c
VII 過敏	A とても敏感である B 敏感さは中位 C ほとんどそんなことはない	49	何か言われるとすぐびっくりする	a	b	c
		50	ちょっと言われたことでもきずつきやすい	a	b	c
		51	見知らぬ人や場所によりつけない	a	b	c
		52	雑踏のところはこわくて行けない	a	b	c
		53	他の子供のことでも我身のように感じる	a	b	c
		54	高い所，とがった物などをひどくこわがる	a	b	c
VIII はずかしがる	A いつもはずかしがる B 時々はずかしがる C ほとんどそんなことはない	55	人の前に出るとはずかしがる	a	b	c
		56	人の前に出るとあがる	a	b	c
		57	自分の名を人前で呼ばれるとはずかしがる	a	b	c

(9)

感情項目	I	II		いつも	時々	ほとんどない
		58	自分のしたことを人前で言われるとはずかしがる	a	b	c
		59	成績が悪いと（人よりできないと）はずかしがる	a	b	c
Ⅸ 嫉妬	A よく嫉妬する B 時々嫉妬する C あまり嫉妬しない	60	人がほめられると嫉妬する	a	b	c
		61	人が持っているものを嫉妬する	a	b	c
		62	人が可愛がられると嫉妬する	a	b	c
		63	人がよくできるとか，はやいとか，すぐれていると嫉妬する	a	b	c
		64	人が仲がよいと嫉妬する	a	b	c
		65	人の家庭（兄弟など）のことを嫉妬する	a	b	c
Ⅹ くやしがる	A いつもくやしがる B 時々くやしがる C ほとんどそんなことはない	66	運動で人に負けるとくやしがる	a	b	c
		67	何でも一番になれないとくやしがる	a	b	c
		68	自分の思った通りにならないとくやしがる	a	b	c
Ⅺ さびしがる	A いつもさびしがる B 時々さびしがる C ほとんどそんなことはない	69	母親がいないとさびしがる	a	b	c
		70	家で一人になるとさびしがる	a	b	c
		71	友達がいないとさびしがる	a	b	c
Ⅻ かなしがる	A いつもかなしがる B 時々かなしがる C ほとんどそんなことはない	72	ほとんどいつもかなしそう	a	b	c
		73	成績で叱られたとき，おけいこに行けと言われたとき，その他何でも叱られたとき	a	b	c
		74	友達のいないとき	a	b	c
		75	友達とけんかしたとき	a	b	c
		76	自分の願いが思い通りにならないとき	a	b	c
		77	体の調子や運動が思い通りにならないとき	a	b	c
		78	母親が家にいないとき	a	b	c
		79	家で一人ぼっちのとき	a	b	c
XIII よく泣く（泣き虫）	A いつもよく泣く B 時々泣く C ほとんどそんなことはない	80	何か言われるとすぐ泣く，涙を流す	a	b	c
		81	他人が叱られても一緒に泣く	a	b	c
		82	すぐ泣くのでなんで泣いているのか分からない（涙線はいつもあいているみたい）	a	b	c
		83	人にからかわれるとすぐ泣きだす	a	b	c

〔資料—Ⅱ〕OCR カード

(1)

整理番号

幼児の社会的発達、感情的発達に関する調査票

＊　幼稚園、保育園が記入

| | | |

(2)

整理番号

用紙コード 1 2 3	Ⅳ	A B C	22 a b c	23 a b c	24 a b c	25 a b c	Ⅴ	A B C	26 a b c			
27 a b c	28 a b c	29 a b c	30 a b c	31 a b c	32 a b c	33 a b c	34 a b c	35 a b c				
36 a b c	37 a b c	Ⅵ	A B C	38 a b c	39 a b c	40 a b c	41 a b c	42 a b c	43 a b c			
44 a b c	45 a b c	46 a b c	47 a b c	48 a b c	Ⅶ	A B C	49 a b c	50 a b c	51 a b c			
52 a b c	53 a b c	54 a b c	Ⅷ	A B C	55 a b c	56 a b c	57 a b c	58 a b c	59 a b c			
Ⅸ	A B C	60 a b c	61 a b c	62 a b c	63 a b c	64 a b c	65 a b c	Ⅹ	A B C			
66 a b c	67 a b c	68 a b c	Ⅺ	A B C	69 a b c	70 a b c	71 a b c	Ⅻ	A B C			
72 a b c	73 a b c	74 a b c	75 a b c	76 a b c	77 a b c	78 a b c	79 a b c					
XIII	A B C	80 a b c	81 a b c	82 a b c	83 a b c							

＊ 父母が記入

記入者 A B	1.1	1 2 3 4 5	1.2	1 2	1.3	1 2 3 4 5 6 7	1.4	1 2	1.5	1 2 3 4 5 6 7
1.6	1 2 3	1.7	1 2 3 4 5	1.8	1 2 3 4 5					

―― 社 会 的 発 達 ――

Ⅰ	A B C	1 a b c	2 a b c	3 a b c	4 a b c	5 a b c	6 a b c	7 a b c	A B C		
8 a b c	9 a b c	10 a b c	11 a b c	12 a b c	13 a b c	14 a b c	15 a b c				
Ⅱ	A B C	16 a b c	17 a b c	18 a b c	19 a b c	20 a b c	21 a b c	22 a b c	A B C		
23 a b c	24 a b c	25 a b c	26 a b c	27 a b c	28 a b c	Ⅲ	A B C	29 a b c	30 a b c		
31 a b c	32 a b c	A B C	33 a b c	34 a b c	35 a b c	36 a b c	37 a b c	38 a b c			
39 a b c	Ⅳ	A B C	40 a b c	41 a b c	A B C	42 a b c	43 a b c	44 a b c	45 a b c		
46 a b c	47 a b c	48 a b c	Ⅴ	A B C	49 a b c	50 a b c	51 a b c	A B C	52 a b c		
53 a b c	54 a b c										

(3)

整理番号

用紙コード 1 2 3 I

VI ABC 55 abc 56 abc 57 abc 58 abc 59 abc ABC 60 abc

61 abc 62 abc 63 abc 64 abc 65 abc 66 abc 67 abc 68 abc 69 abc

VII ABC 70 abc 71 abc 72 abc ABC 73 abc 74 abc 75 abc 76 abc

VIII ABC 77 abc 78 abc 79 abc 80 abc 81 abc ABC 82 abc 83 abc

84 abc 85 abc IX-1 ABC 86 abc 87 abc 88 abc 89 abc 90 abc 91 abc

92 abc 93 abc 94 abc 95 abc 96 abc 97 abc IX-2 ABC 98 abc 99 abc

100 abc 101 abc

感情的発達

I ABC 1 abc 2 abc 3 abc 4 abc 5 abc 6 abc II ABC

7 abc 8 abc 9 abc 10 abc 11 abc 12 abc 13 abc 14 abc III ABC

15 abc 16 abc 17 abc 18 abc 19 abc 20 abc 21 abc IV ABC 22 abc

23 abc 24 abc 25 abc V ABC 26 abc 27 abc 28 abc 29 abc 30 abc

31 abc 32 abc 33 abc 34 abc 35 abc 36 abc 37 abc VI ABC 38 abc

39 abc 40 abc 41 abc 42 abc 43 abc 44 abc 45 abc 46 abc 47 abc

48 abc VII ABC 49 abc 50 abc 51 abc 52 abc 53 abc 54 abc

VIII ABC 55 abc 56 abc 57 abc 58 abc 59 abc IX ABC 60 abc

61 abc 62 abc 63 abc 64 abc 65 abc X ABC 66 abc 67 abc 68 abc

XI ABC 69 abc 70 abc 71 abc XII ABC 72 abc 73 abc 74 abc

75 abc 76 abc 77 abc 78 abc 79 abc XIII ABC 80 abc 81 abc 82 abc

83 abc